

新トップ登場：日の本穀粉・黒田昇社長 無限の可能性秘める米粉

農産加工 インタビュー 2021.08.25 12281号 01面



●チャレンジの時

穀粉最大手・日の本穀粉の代表取締役社長に6月15日、就任した黒田昇氏。年齢差20歳のいここに当たる黒田寛前社長（現会長）から指名を受けた。大学卒業後入社した、父が経営するコメ卸の大阪米穀と、その後傘下に入った伊丹産業時代も含めて30年以上、主食米の世界で生きてきた。それが今回、一転して同じコメでも米粉の世界に入った。

「私にとって米粉は未開の大地。和菓子原料には米粉用新規需要米が使えないなど、外から来た者には分かりにくい制約はあるが、粉はどのようにも化けることができ、無限の可能性を秘めている」と、業界に夢や希望を感じている。

だが、環境は良くない。和菓子原料中心の穀粉最大手の同社にとって、コロナ禍による土産物需要の低迷や、茶会に代表されるイベント中止は、明らかに逆風だ。

だが、近隣住民に愛される和菓子店は総じて元気だ。移動の自粛で制約はあるものの、営業スタッフに同行し、勉強とあいさつを兼ね全国の得意先を可能な限り訪ねている。

こうして足を運んでこそ出会うのが、和洋折衷の商品開発や、従来当たり前のように販売してきた、ササの葉や塩漬けの桜など国産和菓子原料に対する、予想もしなかった新たなニーズだ。ビジネスチャンスにつながるばかりか、中国産が圧倒的なシェアを占める市場にあって、生産者を守ることにもなる。

そこで生かされるのが、創業以来130年間培ってきた「和菓子のことなら何でも知っている」同社のノウハウや研究開発力に加え、和菓子原材料や資材を展開する館山、中間流通からリーテールまでを担う大阪食糧卸といった、グループ企業の存在だ。これらが総力を挙げ、新たな需要を創造しなくてはならない。「当社が今、やらないと伝統や産業がすたれる」という気概もある。

「財産は、長年コメの業界で築いてきた人脈」だ。特に全国の産地とのパイプは太い。黒田寛前社長の目にとまった、米穀業界の誰もが知る明るい人柄で産地から消費地までを巻き込み、売りにつながる仕掛けが急がれる。「環境が厳しい今こそ、チャレンジの時」ととらえている。（佐藤路登世）

*

黒田昇氏（くろだ・のぼる）1965年2月14日兵庫県生まれ。87年宮城教育大学卒業。同年大阪米穀入社。01年伊丹産業入社、20年12月退社。21年1月日の本穀粉入社